The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランスにおける国語教育
Author(s)	和田, 誠三郎
Citation	語文. 1951, 3, p. 45-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68383
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランスにおける国語教育

和田誠三郎

フランスの初等教育（義務教育）、中等教育において、フランス語が何を目標として、どのやうな方法で教へられてゐるかをあらまし紹介しようと思ふ。

一概に初等教育又中等教育といっても、我国のそれとは全く制度内容を異にしてゐるので、先づフランスの教育制度のあらましを述べるのが順序であらう。周知のことだが、フランスは極端に形式主義をきらふ国柄である。義務教育としての初等教育は六才から十四才までに行ふべしとなってゐるが、我国のやうに、たとへ勉強をしなくとも、小学校から中学校へ都合九年間通学するそのことが義務なのではなく、家長が子弟に一般普通教育を施すことが義務なのである。しかもその教育はなかなか高い理想をもってゐる。即ち真似の上手な人間を作るのではなく、創造力を備へた熱心な探求者を創るのが目的だといってゐる。従って教育を受ける場所は自由である。初等教育だけですぐ世の中へ出ようとする貧しい人達は、官公立の小学校へ行き、その課程を履修し終ると国家試験を受けて初等教育終了の免状をもらふ。高等教育まで受けようと思ふ者は、費用は高いが評判のよい私塾へ通ふか、最初から「リセエ」（Lycée 官立中学校）又は「コレエジュ」（Collége 公私立中学校）へ入る。先づ「リセエ」の拾一級（六才）へ入る。逆算して七級（拾才）で前期を了り、銓衡試験を受けて後期へ進む。十一才で六級。十六才で一級。一級を了へるとこゝで「バカロレヤ」（Baccalauréat）の試験（国家試験で、これに通れば大学入学資格を得る。）前期を受け、今度は志望に応じて「リセエ」の最上級即ち哲学科（文科）か数学科（理科）に入り、一年後（凡そ十八才）「バカロレア」の本試験を受けて中等教育を終る。その後は各人の志望と能力に応じて、或は Ecole Polytechnique（エコール ポリテクニーク）, Ecole Normale Superieure（エコール ノルマル シュペリエール）（何れも大学程度以上であり、「リセエ」卒業の最優者が入る。前者は砲兵士官、技師を作る学校。後者はリセエ・大学の教授を作るのが主目的だが実際は一流の哲学者・作家・外交官・政治家・ジャーナリストを出し、フランス的叡智を代表する人達が輩出してゐる。前者は理工科大学とでもいったらよいが、後者には適訳はない。）或は又大学などへ進む。

初等教育は立派な個人（社会人ではない）を創る一般普通教育である。「リセエ」の後期も高等普通教育であるから、他の学科と比べてフランス語の時間が特に目立って多いといふことはない。「リセエ」の六級と五級はA組（ラテン語を履修し将来文科系へ向ふ。）とB組（ラテン語の代りに現代外国語を選び将来理科系へ向ふ。）の二つに分れる。五級以後はA組は更に二つに分れてA組とA′組になる。A組はラテン語にギリシヤ語を加へ、A′組はラテン語だけを修める。このやうに将来の志望に応じて組が分れるが、どの組にも共通して重要な学科は国語即ちフランス語、国史即ちフランス史である。特にフランス語は重要な課目であり、優秀な教授がこれを担当する。たゞこゝで注意すべきことは、課目の名称「フランス語」を文字通りに受取ってはいけないことである。低学級ではフランス語を正しく発音し、正しく書くことを教はり、又文法も教へられるあらうが、すべて文学教育につながり、文学研究に了る。従って「フランス語」は内容から見て「フランス文学」なのである。しかもその「フランス文学」はフランス文化の華、フランス精神の最高の表現であることは周知のことである。このやうに申すと言葉としての「フランス語」が軽視されてゐるやうにみえるが決してさうではない。国語教育は国語愛に基く徹した言葉の教育であると共に文学教育であるといふ意味である。さてこの「フランス語」は「リセエ」の最高学級になると、はっきり「文学」研究と名がかはる。参考までにその時間割の一つを左に示して見る。

国語教育の目的は端的にいって読み書きにあることは勿論だが、フランス人はこのやうな低いところで満足はしない。彼等にとって国語教育の主な目的は、フランス人の凡ゆる知的能力の涵養育成にある。これを最も具体的にいへば、フランス精神の根幹であるところのフランス的明晰を徹底的に体得させることにある。自らもはっきり理解し人にもはっきり理解してもらはうといふ真剣な態度を教へ込むために、知的な訓練の一つとして国語教育が施されるのである。

学課＼学料	哲学料	数学科
哲学	八・五	三・〇
歴史	二・五	二・〇
地理	一・〇	一・〇
文学	二・〇	—
現代外国語	二・〇	二・〇
数学	一・五	九・〇
物理・化学	四・〇	五・五
自然科学	二・五	二・五
計	二四・五	二五・〇

次にその具体的な方法である。

（一） Récitation.（レシタシヨン）。 反覆朗読することであり暗誦することである。フランスの国語教育は先づ「レシタシヨン」で始まると申してよい。筆者が学生時代にフランス人（非常にすぐれた言葉の先生であったが）からはじめてフランス語を習ったとき「二十度（これは沢山といふ意味だが）繰返して朗読せよ。」と毎日のやうに注意されたことが今日もなほなつかしく思ひ出される。「二十度朗読せよ」といふことは結果的に見て「暗誦」することになる。単語から文章へ、それからやがては文学作法に到るまで、叱咤されるまゝに暗誦した時代をふり返って見ると色色のことが考へられるのである。今かりにこの二十度を文字通り二十回と解釈し、文学作法を二十回朗読したとすると、句読法も考へず、文のリズム

を味はふこともなく、意味も考へずに、ただ機械的に読むことは全く不可能であり、さうすることはかへって自然にも反して非常な苦痛をおぼえる。従って暗誦は決して棒暗記ではなく、記憶力の訓練だけを意味するものではない。文学作品の朗読暗誦は文のリヅム（音楽性）を感知させ、文学的なものを感じとる力を養ふ無二の訓練なのである。ベルグソンに従へば暗誦は直観力を養ふ最も大切な訓練になる。次に「レシタシヨン」の第二の段階では、我々の悟性が参加して、文章の意味内容の理解が必然的に随伴してくることは疑ふ余地はない。このやうに、「レシタシヨン」には直観的にものを把握することと、論理的にものを理解するといふ二つの知的訓練が含まれてゐるのである。さてこの「レシタシヨン」といふ訓練はいはば模倣の段階ではあるが、単なる模倣で終始する消極的なものではなく、何時でも創造へと転回し得る能動的な模倣である。著者のインスピレーシヨンに進んで没入し共感しようといふ強い意志を示すところの模倣なのである。ベルグソンはこのやうな「レシタシヨン」を réinvention といってゐるが、よくその真意義をつかんでゐて全く驚く外はない。

（二） Redaction 又は Composition: 平たくいへば書くことである。こちらの作文に当るのであるが、文構成の技術だけをやかましくいふ作文ではない。書くためには書くべき内容（思想といってもよい）がはっきりつかめてゐなければならないし、混乱することなくよく整理されてゐなければならない。このやうな条件がそろへば自然にはっきりと書けるといふのがフランス人の表現の哲学である。そして（一）の訓練が完璧であればそこで消化されたものが（二）の訓練で生かされてくる。低い学級ではこの書くといふ訓練は「文法の練習」といふ形で始められるが、この文法も「思想と言語」といふ関係を念頭において教くられるのが新しい理想と考へられてゐる。この書くといふ訓練のために、数多くの立派な「文法と練習問題集」、又「文体の研究と練習問題集」が書かれて居り、又「リセエ」大学の一流の文学教授がそれぞれの立場から「作文提要」といふものを書いてゐるのを見ても、書く訓練が如何に重視されてゐるかがよく判ると思ふ。

書く場合は勿論話す場合でもそうだが、よく "Bonne société" の "bon usage" といふことがいはれる。Bonne société を具体的に説明すれば、教養の高い男女が集って言語・文学・音楽・美術又政治を語る社交界であり、古来フランス語の純化、フランス文学成長の温床であったパリの文芸サロン（主人公は教養の高い女性）の如きをいふのである。bon usage はそのやうな社会で使はれる美しい気品のあるそして正しいフランス語を意味し、全体の意味はこのやうな立派なフランス語で書き話さなければならないといふことである。こゝではこれ等文芸サロンが生み出した古今の作品がお手本になる。そして幸ひ「レシタシヨン」によって生徒の頭におさめられたものはすぐれた文学作品（の断章）であった。

上の二つの基本的訓練が文学によって支へらてゐることは明らかであるが、この基礎段階を了へて「リセエ」の高学級に進むにつれて、国語教育はいよいよ文学的な色彩を加へる。

（三） 解釈（Explication des textes） こちらの国文解釈はこの課程に入るのであるが、遙に範囲の広い操作を含み、程度の高い理解が要求される。この「解釈」の主要目的は、原典を如何に読むか、原典から何を引き出すかといふことにある。その準備工作とし

て語句の解釈も大切な仕事である。然しこれが全部ではない。古い語句を現代語に移すだけで了ってはならないのである。古語の語源をさぐり、語意語形の変化を知り、古い時代のシンタクスで充分裏づけをする。これは結局表現の凡ゆるニュアンスを把握するためにした準備工作であった。ともかく何れの時代の作品でも、その文学的価値を発見することが最も大切である。思想があれば思想を、美を発見すればエステチークを問題にする。内容と表現の調和といふことも考へて見る。構文の分析をもやってみる。これが極く大まかにいって「解釈」といふものであるが、「解釈」は自然に分析の方に向ふ。然しながらこの分析が単なる分析に終ると、作家の思想を再現し、感動を再生することは出来ない。作品を一つの全体として味はふ綜合へ向ふことを考へなければならない。この段階で使用される原典は一作品の全体ではなく、作品の重要部分を抜粋集録した教科書である場合が多い。生徒はこの教科書の中から研究の対照となる断章（生徒の興味をひき、知的な糧をそこに発見出来るやうな断章）を見つけ出し、これを手がかりとして、一作品の全体に研究の視野をひろげる。すると断章のときには見えなかったやうなことが新に視界に入ってくる。そしてやがて全作品の研究、作家研究、作家の時代研究へと大きく発展するかも知れない。こうなればもう文学の研究である。こういふ風に研究が展開して行けば、「解釈」も自ら分析から綜合へと転回せざるを得なくなる。かくて「解釈」は一歩前進してもよいことになる。「解釈」の次に来る第四の訓練は

（四）Dissertation.（デイセルタシオン）　これは既に堂々たる文学研究である。（一）（二）（三）を土台として自己の研究を展開することである。強ひていへば国語教育と国文学研究、中等教育と専門教育の境界線はこの（三）と（四）の間にひくことが出来ると思ふ。（三）の高い段階では（四）が予見され、（四）には当然（三）が含まれてゐる。（四）は論文に仕上げてもよし、又討論してもよいのだが、文学上の凡ゆる問題に関して研究者自らの意見を論述することであり、作品に関して研究者独自のコメンタリイを作ることでもある。従ってデイセルタションは研究者の独創性・個性・人格が強く表現されなければならない。結局これは国語教育の総仕上を意味する。

（三）以後の訓練において教師は如何なる役割をはたすべきであろうか。（一）（二）の場合のやうに教師が指導者となるのではなく、生徒を文学へと案内するのは実に古今の作家文豪であり、教師は生徒と作家文豪の中を取りもつところの善意の仲介者であればよいのである。

・この小論の間隙を補っていただくために、フランス語の明晰性に関しては、沢潟久敬教授著「仏蘭西哲学研究」（創文社刊）中の「フランス語について――フランス文明の一面」をお読み願ひたい。又「解釈」に関しては、フランス学術研究誌「サンス」第二冊（創元社刊）に載せられた伊吹武彦教授の「Explication française. について」を是非お読み願ひたい。我国国語国文学者を稗益すること極めて大きいと思はれるからである。　なほ二拾六年 阪大仏文学講座の講義の一つ、「仏語教授法」において林教授が「Explication destextes」の理論と実際に就て講義されることを申し添へておく。